

『蓮華』は、世の真理の一つ…

皆様がお唱えしている「南無妙法蓮華經」…これって、どういう意味か説明できますか？私自身この「南無妙法蓮華經」の意味深さに感銘を受けて、法華經を信仰している様なものなのです。今号では私なりに「南無妙法蓮華經」の解釈を分り易く、皆様に御説明できればと思い掲載させて頂きました。

ではまず「南無」とは帰依と訳します。簡単に言うると「身も心も全てを捧げて信じます」という意味です。また「南無阿彌陀仏」とは、浄土系の方達がお唱えしておりますが、「阿彌陀様に帰依します」という意味でお唱えしているのです。「南無妙法蓮華經」と「南無阿彌陀仏」の違い等は紙幅の関係上、今号では説明を控えさせて頂きますが、またの機会にその違いを証明したいと思えます。とにかくここでは「妙法蓮華經」の説明だけに留まります。

法華經は28品(章)から成ります。その法華經は全部で、6万9千3百84文字から成る壮大な内容のお話です。その法華經の功德を一言で言い表すと「妙法」という言葉になるのです。この意味を1つずつ説明するよりも、今回は「蓮華」に焦点を当ててご説明させて頂きたいと思

ます。その方が読者の皆様も、より理解しやすいように思いますので、勝手ながらその様にさせて頂きます。

それでは「蓮華」という事ですが、皆様がよくご存じの「蓮の華」の事でありませぬ。あの「蓮華」を想像してみても下さい…。どこにどの様に咲き誇っていますか？蓮華は、泥水の中で色々な色の綺麗な華を咲かせていますよね。例えば、あの泥水は私達の生活している娑婆世界だと仮定してみても下さい。私達の生活、身の周りには泥水にも似た苦しみや、悩み、迷い、欲望が渦巻いています。ここで1つ理解して頂きたいのが、人間生きている限り、基本的にこの悩みや苦しみが無くなることは絶対にありません。しかし蓮華は、その悩み苦しみに打ち勝ち、汚い泥水に染まることなく、綺麗な華を咲かせましようという、私達の生きる強い気持ち、意志を表しています。また、人間の生き方の姿そのものとも言えるのではないのでしょうか？

それだけではありません。ちよつと待つて下さいよ…物事は2面性から成ります。成功と失敗、表と裏、プラスとマイナス、陰と陽がある様に…。物事の見方や考え方を変えれば、もう一面の「蓮華」が浮かんでくるという事になります。ではそのもう1面の「蓮華」を考えてみましょう。

蓮華と言えば、例えば綺麗な花畑に

咲いていますか？いいえ咲きませぬ。では、澄んだ河の水面に咲き誇りますか？いいえ咲きませぬ。見たことも聞いたこともない。その様な綺麗な澄んだ場所に蓮華は咲かないのです。あの蓮華は、汚い泥水の中でしか咲くことが出来ないのです。汚い泥水を養分として、はじめてあの綺麗な華を咲かせることが出来る。従って蓮華は、あの泥水無くして咲くことは出来ないという事になります。これを私達の人生に置き換えると、泥水の様な苦しみや悩みがあるからこそ、嬉しい気持ちにもなれば、有難さを感じる人間に成長することが出来るのではないのでしょうか？私達は命ある限り、どこまでいっても、悩みや苦しみが絶える事はないのです。逆に、その時その時に降りかかる悩みや苦しみがあからこそ、私達は生きている価値や、命を実感することが出来るはずなのです。悩みや苦しみが無い人間なんて、生きながらにして死んでいる「生きた屍(しかばね)」と言えるのではないのでしょうか？

では苦しみと楽しみはどちらが先か？間違いなく苦しみの方でしょうね。苦しみを知っていないからこそ、楽しみが分るのです。苦しみを知らないのに楽しみが分るはずがないのです。仏様はどこにいますか？仏様は自分自身の心中においてになります。仏様を感じることが出来る自分がいるからこそ、仏様が存在するのです。逆に自分とい

う存在がなければ、どこにも仏様は存在しないのです。生があるからこそ死がある様なもの。因があれば必ず結果があるのです。これは当たり前のことなのです。死ぬことを知っているからこそ、今ある自分の人生の時間が、何ものにも代え難い貴重な時間となって光り輝くのです。自分の目の前にある悩み苦しみは、自分で解決できる事しか降りかかりません。したがって自分に降りかかってきた事は全て自分自身で解決できるのです。その様に信じた時、悩みや苦しみを真に受け入れる事が出来る。私達はあの蓮の華の様に、綺麗な華を咲き誇る事が出来るのです。自分の魂を磨き、よりよき人生を歩む為に、泥水が必要なのです。

合掌 副住職 谷川 寛敬

